

Title	スウィフトのプライド観(V) : 「ガリバー旅行記」を中心に
Author(s)	渡辺, 孔二
Citation	Osaka Literary Review. 5 P.1-P.12
Issue Date	1966-07-01
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25757
DOI	10.18910/25757
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

スウィフトのプライド観(Ⅴ)

—「ガリバー旅行記」を中心に—

渡 辺 孔 二

この小論で、スウィフトがプライドというものをいかに攻撃しているかを「ガリバー旅行記」を中心に論じてみたい。特に、「ガリバー旅行記」において、人間全体のプライド及び個人のプライドをどのように攻撃しているか、又、その攻撃はいかなる願いからなされたものとみなされるか、考えてみたい。

× × × × ×

スウィフトの生きた17世紀後半から18世紀前半にかけてのプライドへの攻撃は、人間一般のプライドに着目してなされる傾向にあった。殊に、諷刺家達の関心はそうであったといえる。A. O. Lovejoy も次のように指摘している。

But the pride to which such a typical writer as Pope, in the *Essay on Man*, most frequently refers is not primarily the pride of the individual human creature comparing himself with others of his species, but the generic pride of man as such. ⑩

スウィフトによるプライドへの攻撃も、こうした同時代の諷刺家と同じ傾向を有しており、同時代的であることは、例えば、彼の書いた詩にもよくあらわれている。中でも *The Beasts Confession to the Priest* (1732) や *On Poetry: A Rhapsody* (1733) の中の語句によくその傾向がうかがえる。

ところで、英文学における18世紀前半のプライドへの言及は、主に、Scriblerus Club の会員を中心にしてなされたのであるが、⑪ Alexander Pope の *An Essay on Man* (1733—34) におけるプライドへの言及に代表されるように、彼らはプライドを攻撃する際、当時人々によく知られていた Chain of Being の考えを用いているが、スウィフトも又、その考

えを利用していることは、上述した詩にもよくあらわれている。しかし、最もその考えをうまく利用して、人間のプライドを攻撃したのは、彼の作品の中では、1726年出版の *Gulliver's Travels* である。

スウィフトは *Gulliver's Travels* において、通常、プライドというものを生じさず人間の肉体や精神、又、人間の作り出す文明というものへの攻撃を通して、側面から人間のプライドを攻撃するために、Chain of Being における人間の位置の不安定な、均合いのとりにくい状態を利用している。そのことは、*Gulliver's Travels* の登場者をもよくわかる。第一部のリリパット人とガリバー、第二部のプロブディンナグ人とガリバーの対比は、身体の大小といった肉体的方面で Chain of Being の考えが用いられ、第四部では、人間の reason と brutality といった精神的方面で Chain of Being の考えが用いられている。Scale of Being からすれば当然人間より下に位すると考えられる馬に、pure reason を与えて、フウイヌムという動物を作り、更に、人間から reason を奪い去り、brutality のみを持たせた時出来上るようなヤファーという動物を作り、フウイヌム・ガリバー・ヤファーの相互関係から、人間という均合いのとりにくい存在物を浮彫にしている。（第三部に登場する人物にもそうした配慮がはらわれている。）

スウィフトは、*Gulliver's Travels* において、ガリバーという主人公と或る距離を保ちつつ、時には、仮面をぬぐい去る様子を呈しながら、上述した登場者を諸々の場所に配置し、人間の肉体、知性、或は道徳、政治、科学といったものを、topical なものに言及しながら述べ、スウィフト独自の顕微鏡のような眼や皮肉な眼でとらえた人間像を、表面的には、否定の形を通して提示し、人間の肉体の醜さ、人間の理性の墮落、それに伴う文明の悪といったものを克明に描写することによって、人間の抱く人間に対するプライドの生じる余地がないまでに、人間の悪を語りつくしている感があるが、中でも、人間の肉体への描写は烈しいものといわねばならない。

なぜ、烈しいか。それは、人間にとって、いかに改めようとしても、人間の肉体を変えることが出来ないといった宿命的な理由のためである。第二部のプロブディンナグ国の女姓の姿や排泄物、乞食の群や体臭などへの描写、更には、第四部のフウイヌム国のヤファーの姿への描写によって、人

間が人間の肉体に対して抱く誇りは、残酷なまでに打ちくだかされている。醜さのかたまりのようなヤフーでさえ、平均的な人間であるガリバーを見てその姿にギョッととなっている。

Upon the whole, I never beheld in all my travels so disagreeable an animal, or one against which I naturally conceived so strong an antipathy. So, that thinking I had seen enough, full of contempt and aversion, I got up and pursued the beaten road, hoping it might direct me to the cabin of some Indian. I had not gone far, when I met one of these creatures full in my way, and coming up directly to me. The ugly monster, when he saw me, distorted several ways every feature of his visage, and stared, as at an object he had never seen before ; ③

このように、ヤフーにまで、同類とみなされる、いやヤフー以上に醜いとみなされる人間は、すでに、第二部において、ガリバーが英国及び英国人について述べ終った際、良識あるプロブディンナグの陛下によって、人間は害虫同然だと結論され、人間の存在自体さえ価値のないものとされていたのである。

.....But, by what I have gathered from your own relation, and the answers I have with much pains wringed and extorted from you ; I cannot but conclude the bulk of your natives, to be the most pernicious race of little odious vermin that nature ever suffered to crawl upon the surface of the earth. ④

勿論、こうした人間の肉体への描写や人間を害虫同然とみるといった描写、更には、フウイヌムの主人がガリバーに語りかけるように、⑤ reasonの墮落を brutality よりもおそろしいものであるといった風に述べていることは、スウィフトがよく用いる極端な表現によって、人間というものが抱いている人間への思い上りを封じ、現実の個人の行動力にかかわりあいのあるプライドに、側面から攻撃の矢を向けているわけであるが、人間には自分を含む人間をよく思おうとするプライドがあり、諷刺というものが読み手の良心になんの曲折もなく作者の願い通り、響くとは限らない。そこに諷刺というものの一つのしかも最も大きなむづかしさがある。⑥ 時には作者の願いとは大きく異なり、読み手に反感のみを抱かせ、自分の

問題として考えさせないこともあり得るわけであるが、そのことをスウィフトは *Gulliver's Travels* 執筆前からよく知っていた筈である。1704年出版の *The Battle of the Books* の *The Preface of the Author* の中で、彼は次のように述べている。Satyr is a sort of Glass, wherein Beholders do generally discover every body's Face but their Own ; ⑩

しかし結果的には、例えば、*Gulliver's Travels* の肉体への描写は、読み手のプライドを大いに傷つけたきらいのあることは、W. M. Thackeray のことばをみてもわかることである。⑪

だが、見方をかえればそれが又、スウィフトの狙いであったともいえる。スウィフトは Pope に次のように書き送っている。

I have employed my time (beside ditching) in finishing, correcting, amending, and transcribing my travels, in four parts complete, newly augmented, and intended for the press when the world shall deserve them, or rather when a printer shall be found brave enough to venture his ears. I like the scheme of our meeting after distresses and dispersions, but the chief end I propose to myself in all my labours, is to vex the world rather than divert it ; ⑫

この書簡からもわかるように *Gulliver's Travels* は読み手を楽しませるよりはむしろ怒らせるために書かれたのである。ことばをかえていえば、読み手のプライドを傷つけるために書かれたのである。スウィフトの願いは、読み手が笑ったあとで怒り、怒ったあとで現実の人間の姿に眼を向け、読み手自らの生き方を謙虚に考えることにあったといえる。

Gulliver's Travels において、スウィフトは人間の dignity というものは、人間への謙虚な認識から考えられねばならないということを、人間嫌い、人間否定という逆説を用いて述べているともいえる。スウィフトがガリバーに語らせている次のことばは、*Gulliver's Travels* の一つの大きな狙いである人間のプライドを弱めようとする態度をガリバー流に置きかえたものといえる。

My reconciliation to the Yahoo-kind in general might not be so difficult, if they would be content with those vices and

follies only which nature hath entitled them to. …… but, when I behold a lump of deformity, and diseases both in body and mind, smitten with *pride*, it immediately breaks all the measures of my patience ; neither shall I be ever able to comprehend how such an animal and such a vice could tally together. …… therefore, I here intreat those who have any tincture of this absurd vice, that they will not presume to appear in my sight. ⑥

ところで、このように述べるガリバーのプライドは滑稽なものといわねばならない。

ガリバーはリリパット国においては温和な批判精神の乏しい、教養のある人であったが、プロブディンナグ、ラビュタ、バルニバービ、ラグナグ、などへの旅の後、フウイヌムの国へ渡り、フウイヌムの人間には到底望めそうもない理性のすばらしさに感化され、自分がまるでフウイヌムのような理性を持ち得たと錯覚する人となる。そして、そうした錯覚の上に築かれたプライドから、人間を軽蔑し人間のプライドを烈しく攻撃しているが、「ガリバー書簡」にみられるように、人間がその非を改めないといって絶望し、馬の嘶きを生き甲斐とするような人間嫌いになり、人間自体をも否定するほどのプライドをもつに至っている。要するにガリバーのプライドは自分とフウイヌムとを同一視するところから出ているが、ガリバーは決してフウイヌムにはなれない普通の人間である。人間は *pure reason* のみで生きることが出来ないように、ガリバーはフウイヌムの如く、理性万能では生きることが出来ないにもかかわらず、理性万能で生きようとして過度の緊張をあらわし、ついに人間嫌いになっている点、ガリバーもプライドに毒された人といえる。*The Battle* の蜘蛛が巣や毒液を誇り、蜜蜂に対して傲慢さをあらわしているように、又、*A Tale of a Tub* の Peter が自らを '*God Almighty*', '*Monarch of the Universe*' と呼んでいると同じように、ガリバーも又、プライドに毒されて、自分が人間嫌いであることを誇らしげに述べている。

The united praise of the whole race, would be of less consequence to me, than the neighing of those two degenerate Houyhnhnms I keep in my stable ; because, from these, degenerate

as they are, I still improve in some virtues, without any mixture of vice. ⑩

これからもわかるように、ガリバーはプライドの喜劇の主人公を演じている。

ところで *Gulliver's Travels* の主人公ガリバーを自由自在に操っている当のスイフト自身のプライドはどうであったのか。彼の生涯の諸々の事件を想い、彼についていろいろの人々の述べていることばを考え合せると、⑪ スウィフトのプライドも又相当のものであったといわねばならない。彼は、確かに、正に、a proud man であったのであるが、a proud man であるスイフトが、ガリバーとは違った性質のある願いを、彼のプライドへの攻撃の底に秘めていることを見逃してはなるまい。ことばをかえていえば、a proud man であるスイフトが、尚且、プライドを攻撃する、その密度の濃さを知ることこそ、彼を知る一つの手がかりを与えてくれるのではあるまいか。プライドの善も悪も知りつくしているような当のスイフトのプライド攻撃故に、スイフトのプライド攻撃は意味がある。スイフト自身のプライドに関しては、ここでは、唯、Samuel Holt Monk のことばを挙げるにとどめておく。

Swift himself, in his personal conduct, displayed an arrogant pride. But he was never guilty of the angelic, dehumanizing pride of Gulliver, ………. ⑫

確かに、スイフトは神をあざむかないまでも、彼のことばを借りれば、‘unvanquish'd pride’ ⑬ を人一倍もっていたのであるが、それだからといって、スイフトがプライドを攻撃する根拠がスイフト自らのプライドによると断言することも出来ない。スイフトのプライド攻撃にもある願いがあり、その願いと結局、人は現実をいかに生きねばならないかといった問題を読み手に考えさせることではなかったか。スイフトの人間観・理性観といった基本的問題と彼のプライド観をつきあわせてみると、そのことはよりはっきりして来る。

彼の人間観を最も簡潔に表現しているものとしては、Pope への書簡の語句を引用するのが、やはり、最も適切であろう。

I have got materials toward a treatise, proving the falsity of that definition *animal rationale*, and to show it should be

only *rationis capax*. ⑥

これは *Gulliver's Travels* 執筆に関して、Pope に書き送った書簡の一節であるが、この例からもわかるように、スウィフトは人間を「理性的動物」としてではなく「理性的になり得る動物」とみているのであるが、この「なり得る」という見方は、人間に対する謙虚な、しかも願いのこもった積極的見方と考えられる。なぜ、「なり得る」と考えたのか、そのことを知るためには、少なくとも人間への見方の上に、人間の理性への見方をおぼせてみなければならない。理性に対するスウィフトの見方は次の語句に要約されている。

Reason itself is true and just, but the reason of every particular man is weak and wavering, perpetually swayed and turned by his interests, his passions, and his vices. ⑦

このように人間というもの、人間の理性というものを認識しているスウィフトは、人間の不完全さを認識していたといえるのであり、人間の original sin を忘れた思い上がった考え、行動を非難したのは、彼の異常だといわれたりする性格や当時の状況における彼の属する陣営の利害関係というものを別にしても、うなづけることである。人間のプライドへの願ひも又、そうした人間の不完全さへの認識を求めることにあったといえる。

A thorough practice of this duty of subjecting ourselves to the wants and infirmities of each other, would utterly extinguish in us the vice of pride. For, if God has pleased to intrust me with a talent, not for my own sake, but for the service of others, and at the same time hath left me full of wants and necessities, which others must supply; I can then have no cause to set any extraordinary value upon myself, or to despise my brother, because he hath not the same talents which were lent to me.

His being may probably be as useful to the publick, as mine; and therefore, by the rules of right reason, I am in no sort preferable to him. ⑧

勿論、スウィフトは決して人間個人のプライドが完全になくなることを確信したわけではない。スウィフトの願ひは、個人が人間という理性と獸

性を兼ね備えた、不可解な存在物であり、しかも life という限られた、いつかはきつとなくなる哀しい宿命をもったものであることを認め、そうした認識から生れる力強さをもって、現実を如何に生くべきか現実を生きる場合、自らをどう処すべきかを考えることにあったのである。

通常、人間は生きているとき死ぬ運命というものを忘却し勝ちである。或は長生きしたい、死にたくないとも考える。しかし、往々にして死のあることを認め、生きることに全力を尽す態度を忘れ勝ちである。それはスウィフトのこトばを借りれば、この世で 'being well deceived' ⑩ されているためである。しかもうまく騙されたまゝ長生きしたときでさえ、*Gulliver's Travels* 中のラグナグの不死の人、ストラルドブラグのように頑固になり、自惚が強くなり、食欲になる傾向のあることを、スウィフトはストラルドブラグになりたがる人々に暗示させている。

When they came to fourscore years, which is reckoned the extremity of living in this country, they had not only all the follies and infirmities of other old men, but many more which arose from the dreadful prospect of never dying. They were not only opinionative, peevish, covetous, morose, vain, talkative ; but incapable of friendship, and dead to all natural affection, which never descended below their grand-children.

Envy and impotent desires, are their prevailing passions. ⑪
スウィフトは死への認識から生きる態度を問題にし、生きるという積極的の態度には、自分を必要以上によく思ったり、思われたりしたいプライドや他人を必要以上に軽蔑しようとするプライドは害多いものであり、そうしたプライドは死という神の人間に与えた sin を無視するものとして、攻撃したと考えられる。

又、プライドというものを生じさすものとして、富、地位、学識、権力といったものがあるが、スウィフトはそうしたつかの間の豊かさは神の trust に過ぎないという信念をもっている。

....., great riches are no blessings in themselves :, power is no blessing in itself,, even great wisdom is,, not a blessing in itself :, ⑫

それらは単に神の trust に過ぎず、それらを如何に現実に役立てるか、

その点にスウィフトは着目し、^④ そこからプライドを攻撃したことも考えられるが、人間は往々にして、自らのつかの間の豊かさを誇り、その悪い結果が現実にあらわれる傾向のあることは、スウィフトが、例えば、プライドと戦争というものを結びつけていることからもうなづける。^⑤

死への認識、更には豊かさを神の trust とみるスウィフトが人間の行動力の源を何に求めたかは次のことばに要約されている。

It is allowed, that the cause of most actions, good or bad, may be resolved into the love of ourselves : but the self-love of some men, inclines them to please others ; and the self-love of others, is wholly employed in pleasing themselves. This makes the great distinction between virtue and vice. Religion is the best motive of all actions, yet religion is allowed to be the highest instance of self-love. ^⑥

スウィフトという人は、確かに、良い意味でも又、悪い意味でも人一倍プライドを有していた人であって、そのスウィフトが人間のプライドを攻撃する姿は、悪意に満ちた解釈をすれば、ガリバーが人間のプライドを攻撃しているように、滑稽な姿とも考えられるが、又、見方を変えれば、人一倍プライドを有していたスウィフトがプライドを攻撃する、その願ひ故に意味があるともいえる。静けさを最も退屈なもの^⑦とする烈しい気性で生涯を送り、しかも墓場へ行くまで怒りを和らげることの出来なかった^⑧スウィフトであるが、そのスウィフトの中に、彼の一面のあらわれとして、神への信仰を生きる信念として、人間の不完全さを認め、現実を誠実に、しかも謙虚に生きることを願ひながら、プライドを攻撃している態度のあることも認めなければなるまい。

× × × × ×

〔注〕

- ① Arthur O. Lovejoy, *Essays in the History of Ideas* (Capricorn books, 1960) p. 63.
 ② Bonamy Dobrée, *English Literature in the Early Eighteenth Century 1700—1740* (Oxford, 1964) p. 448 参照のこと。

- ③ *Gulliver's Travels* (ed.) Harold Williams (Everyman's Library, 1960) p. 238.
- ④ *Ibid.*, p. 140.
- ⑤ But, when a creature pretending to reason, could be capable of such enormities, he dreaded, lest the corruption of that faculty, might be worse than brutality itself. He seemed therefore confident, that instead of reason, we were only possessed of some quality fitted to increase our natural vices ; as the reflection from a troubled stream, returns the image of an ill-shapen body, not only *large*, but more *distorted*.
Ibid., p. 264.
- ⑥ James Sutherland も次のように述べている。
One of the satirist's main problems, therefore, is how to touch the conscience of his reader, how to make the reader apply the satire to himself.
English Satire (Cambridge, 1962) p. 86.
- ⑦ *A Tale of a Tub etc.*, (ed.) A. C. Guthkelch and D. Nichol Smith (Oxford, 1958) p. 215.
- ⑧ W. M. Thackeray は女性に向って次のように述べている。
..... ; as for the moral, I think it horrible, shameful, unmanly, blasphemous ; and giant and great as this Dean is, I say we should hoot him.
The English Humourists and the Four Georges (Everyman's Library, 1949) p. 34.
- ⑨ 1725年9月29日附のAlexander Pope への書簡。
- ⑩ *Gulliver's Travels*, pp. 317-318.
- ⑪ *A Letter From Capt. Gulliver, To his Cousin Sympson, Gulliver's Travels*, p. 6.
- ⑫ 例えば Pope は次のようにスウィフトの生活態度を述べている。
Doctor Swift has an odd, blunt way, that is mistaken by strangers for ill nature. *Works*, (ed.) John Nichols (London, 1801)

Vol. I. p. 498 参照のこと。

又, Johnson も次のように指摘している。

....., instead of wishing to seem better, he delighted in seeming worse than he was. *Lives of the English Poets* (Everyman's Library, 1961) Vol. II. p. 268.

⑬ *The Pride of Lemuel Gulliver*, in *Eighteenth-Century English Literature*, (ed.) James L. Clifford (A Galaxy Book, 1959) p. 129.

⑭ 彼の詩, *To my Congreve* (1693/1789) の中にそういうことばがある。

⑮ 1725年 9月29日附けの Pope への書簡。

⑯ *A Sermon on the Trinity*, *Works*, Vol. X. p. 28.

⑰ *A Sermon on Mutual Subjection*, *Works*, Vol. X. p. 38.

⑱ *A Tale of a Tub*, p. 171 参照のこと。

⑲ *Gulliver's Travels*, pp. 225—226.

⑳ *A Sermon on Mutual Subjection*, *Works*, Vol. X. pp. 41—42.

㉑ Louis I. Bredvold は次のように指摘している。

It is the expression of a bitter but not a sick mind, and has the invigorating power of a call to action.

The Gloom of the Tory Satirists in Eighteenth-Century English Literature, p. 8 参照のこと。

㉒ 拙論「スウィフトのプライド観(Ⅱ)——*The Battle* の場合——」(*Osaka Literary Review*. No. II, 1963.) 参照のこと。

又, *Gulliver's Travels* においても次のように述べている。

Alliance by blood or marriage, is a sufficient cause of war between princes; and the nearer the kindred is, the greater is their disposition to quarrel: *poor* nations are *hungry*, and *rich* nations are *proud*; and pride and hunger will ever be at variance.

Gulliver's Travels, p. 262.

㉓ *Thoughts on Various Subjects*, *Works*, Vol. V. pp. 459—460.

㉔ 1693年12月6日附けの Thomas Swift への書簡でスウィフトは次

のように書いている。

…… I imagine a dead Calm to be troublesomest part of our
Voyage thro the World ; ……….

- ㊥ ダブリンの聖パトリック寺院にあるスウィフトの墓には次のような自選の銘文がある。

Ubi saeva indignatio

Cor ulterius lacerare nequit.

〔付 記〕

この小論は、日本英文学会第37回大会（於神戸女学院大学）における研究発表「スウィフトのプライド攻撃」と重複する部分がある。